

政治的変動期における文学教育

ーモンゴル・ウランバートル市の学校を事例にー

東京外国語大学大学院地域文化研究科研究生

山 田 斉 子

はじめに

本研究の目的は、モンゴルの学校における文学教育と政治変動の関係性をみていくことにある。この研究背景には、政治と教育には深い関わりがあり、それゆえ政治的な変動は学校教育にも大きな影響を及ぼしているという点がある。20世紀のモンゴルには、社会主義の選択と放棄という政治的な変動があったこと、またモンゴルでは文学が「人と成る」ために必要なものとされ、道徳的な教育の一部としても重要視されていることから、文学教育に政治的な変動が色濃く反映されていると考える。特にモンゴルの詩は声に出すということを前提に作られていることから、詩を朗読するというのが、文学教育の場において、生徒にどのような影響を及ぼし、どのような役割を果たしているのかを考察していくことにする。

日本におけるモンゴル文学研究は那珂通世の『元朝秘史』の翻訳[1907]から始まっているとされる¹⁾。この翻訳以降、日本における『元朝秘史』研究は東洋史学、文献学、言語学の各分野で精力的に研究されていくこととなる。また人類学の分野では口碑研究が盛んとなる。戦前のモンゴル文学研究の集大成は小林高四郎の『蒙古大観』[1938]にみられるが、戦前の研究においてはモンゴル文学を文学的に研究するという手法はとられておらず、歴史学や言語学の研究「素材」として扱われていた。

モンゴル近現代文学研究が日本において盛んとなるのは、戦後のことになる。1960年代はじめ頃から、ロシア語や中国語に翻訳されたモンゴル文学のテキストの日本語訳や、それらを用いた文学論が紹介されはじめた。

以降、モンゴル文学の作家や作品論が研究されていくこととなった。作家や作品の研究に関しては岡田[1999など]、芝山[1999など]らの研究に詳しく紹介されている。モンゴルの口承文芸については、楊の研究にみられる詩や叙事詩の写本に関する人類学的な考察[1999、2005など]や、儀礼との関連で口承文芸を分析する小長谷の研究[1999など]、叙事詩のテキスト研究としての藤井[2001、2003など]、蓮見[1989など]などの研究がある。

従来のモンゴル近現代文学²⁾の研究には、政治史との関係から作家や作品を研究したものが多い。しかし学校教育における文学研究の役割や、教科書に関する研究はまだ少ない。これは社会主義体制下において、ソ連の影響と干渉を受けていたがために、日本を含め西側諸国との関わりが薄くなっていたことなどが原因のひとつとして挙げられるであろう³⁾。

本研究は政治・学校教育・文学を軸として、政治変動期のモンゴルにおける国民形成のありかたの一端を探るものである。他の地域において歴史・宗教・国語教育などの学校教育と関連させた、国家と国民形成の研究⁴⁾は多くみられるが、本研究はモンゴルでの文学教育の事例として位置付けられると考える。

本稿の構成は、まずモンゴルの文学教育の目的を示し、社会主義時代と民主化以降の教科書を考察することによって、政治的な変動が教科書や授業にどのように反映されているかを明らかにする。それを踏まえた上で、実際の教育の場である学校では、どのような文学教育が行われているかを、フィールドワーク調査をもとに記述していくこととする。本稿の中心となるのはこの実際に行われている文学教育に関する記述である。モンゴルにおける文学教育の目的を社会主義時代、民主化以降の文学の教科書からそれぞれ考察していく上で、実際に学校ではどのように文学教育が行われているのか、行われていたのかを参与観察、インタビューを基に記述していくことにより、特に詩や詩の朗読が教育現場で担った役割をみていくことができたからである。

本稿におけるフィールドワークは、モンゴル国ウランバートル市において行った。期間は2004年9月から2005年9月までの語学留学を兼ねた1年間と、2006年2月から3月の1ヶ月間である。調査方法としては、市内に

ある私立H学校と公立N学校、T学校の授業に参加し、文学教育の現場を観察するとともに、同校の文学教師、生徒たちにモンゴル語によるアンケート及びインタビューを行っている。ただしアンケートに関しては、インタビューや教室内での生徒との会話のきっかけとして、またモンゴル近現代文学に関する生徒たちの意見の大枠を判断する材料としている。教師とのインタビューは1対1で行い、生徒とのインタビューは基本的に教室内で休み時間などを用いて生徒複数人で行った。学外では、社会主義時代を経験している人々を対象に、当時の学校生活などの様子をインタビューした。

モンゴルでは2005年9月から新教育課程がスタートし、従来の公立10年制から11年制への移行が行われた。それに伴い新しいカリキュラムが作成されているが、授業で扱っている内容や教科書にそれほど変化がないこと、現在は移行期間であること、今回の調査では学年ごとの体系的な調査を行わなかったことなどから、11年制への移行は参考程度にとどめている。よって本論文中に記載されている学年は、全て旧制度での学年次である。

なお本稿は2006年7月、京都文教大学大学院文化人類学研究科に提出、受理された修士論文『モンゴルにおける学校教育と「祖国」像の形成 ― 社会主義時代と民主化以降の文学教育を事例に』の第Ⅲ章「文学教育と詩」を、加筆・修正・再考したものである。

I. モンゴルの文学教育

1. 文学教育の目的

モンゴルの学校における文学の教育は、基本的にモンゴル語（国語）の教育とは区別される。多くの学校では文学とモンゴル語の教師は兼任であるが、文学の授業とモンゴル語の授業は別々に設けられ、授業数はもちろん、授業の目的、方針も異なるものとなっている。モンゴル語の授業では、文学作品なども使いながら、キリル文字やウイグル式モンゴル文字の習得、慣用表現の理解、読解、作文などが行われ、主に文字や文章表現方法の習得や理解が目的となっている。一方、文学の授業では、文学作品を通じてその背景にあるモンゴルの国や四季、生活習慣、遊牧などに関する知識を

得ると同時に、それらを身に付け「人と成る」ための教育が行われている。
現役教師の S 氏は、

「文学の背景には様々なものがある。それを学ぶと同時に、特に基礎となるのは、『人と成る』ための教育をすることにある。」(インフォーマント S 氏)

と言い、また社会主義時代にも教鞭をとり、教科書の執筆などにも携わる元教師の G 氏は、

「文学は人の根幹を支えるもの。良い文学を学べば、良い人間となる。人の本質を良くするために、そういう（良い）人間を育てるために文学はあり、文学の授業はそのためにある。」(インフォーマント G 氏)

と言っている。

教育によって教養を身に付けるということは、それ自体が既に「人と成る」ということを目的としている訳だが、特に重要なことはそれを文学から学ぶというのが、モンゴルにおける教育の特徴であるだろう。文学教育は単に文学作品を通して自国のことを知るということだけではなく、道徳教育の役割も果たしているのである。

事実、教育省発行の文学教育の指導要綱にも、

「文学教育の必要性は、価値ある人として社会に存在し役に立つ人を教育するという要望によって決定される。」[教育要綱 2004]

とあり、これは社会主義時代の要綱にも、

「文学の授業の目的は子供たちに言葉の持つ素晴らしい一面を教え・・・文学を読むことによって、人の精神を成長させ上のレベルへと進ませるものである。」[教育要綱 1976]

とあるように、文学教育の基本として受け継がれてきていることが分かる。

今回の調査対象となったウランバートル市内にある3校の学校でも、文学教育の目的は明確な形として現れている。私立H学校、公立N学校では文学の教室に下記の標語が張り出され、文学教育の目的を生徒たちに分かり易く示している⁵⁾。

「文学は人生（生活）の教科書である」（H学校）

「本の意義は海のように深く、空のように広く、世界のように大きい：
ダムディンスレン⁶⁾」（N学校⁷⁾）

また、公立T学校の教師の手引きには、文学教育の目的に「人間の本質、人々の善良な性質について理解させ、話し合う」（「ЗОРИЛГО; ХҮНИЙ зан чанар хүмүүсийн сайхан зан чанарын тухай ой」）という項目が設けられており、いずれの場合でも、文学教育の根底に道德教育的な意味合いを持たせていることが分かる。

では実際に、道德教育のような役割を持ち、人間の本質を理解させ、「人と成る」ための教育はどのように行われているのであろうか。またそこで求められる道德や人間の本質とは、具体的にどのようなことを指しているのであろうか。

道德教育や人間の本質という言葉は、一見、永久不変的な意味を宿し、常に変わらぬ価値観を提示しているかのようにも受け取れる半面、非常に曖昧で抽象的な言葉でもある。それらを明確にするためにも、道德的な価値観や人間の本質ということを教育の場でどのように教えているのか、何を通じてそれらを教え、いかに理解させているのかということを検討していく必要がある。そこで本章では、まず文学の教科書を時代ごとに追って、そこで取り扱われている題材と教育方法を手掛かりにみていく。その上で、実際にどのような教育が学校で行われているのか、また特に文学の基礎を成している重要な要素である詩の教育が、文学教育の中でどのような役割を果たし、そこから何を学んでいくのかを考察していくこととする。

2. 社会主義時代の教科書

1921年の人民革命以降、モンゴルでは学校教育が整備されていったが、この人民革命を機に学校教育を含む、モンゴルの文化教育事业⁸⁾が大きな変化を遂げていったことは明白である。

まず党が示した文化教育事业は、仏教や封建制の中世的因習と「闘う」ことに向けられている。『モンゴル史』[モンゴル科学アカデミー歴史研究所 1988⁹⁾]によれば、このような文化教育事业は、「モンゴルの社会生活を社会主義的基盤の上に変革するために勤労大衆が行ってきた革命闘争と密接な関係をもって遂行されていた」としている。実際、人々の大半が読み書きができず、仏教的の教えに従っていた状況から、学校教育をはじめとする文化教育機関を設立・充実させることによって、革命思想に基づいた党・政府の政策を普及させていったのである。党の指針となっていたのは、

「一われわれは、宗教的なごまかしと純粋に思想的な武器で、また思想的な武器だけでたかう。すなわち、われわれの定期出版物やわれわれの言論によって闘うために、宗教と国家の完全な分離を要求している。」[モンゴル史 1988: 430]

というレーニンの教えであった。

このような人民政府初期の仏教への批判にはじまり、政府の政策の普及、政治意識の改革、それらを基盤とした社会主義国家の成立に大きな役割を果たしたのが、文化教育事业の中核となった新聞、雑誌、文学作品などの出版物である。

1929年には最初の社会・政治・文芸雑誌である『赤い光明（Улаан туяа）¹⁰⁾』が創刊され、1932年からは『革命文学（Хувьсгалн уран зохиол）¹¹⁾』が出版されるようになった。この当時の出版物は、

「仏教の反動性を暴露して封建制の残滓と闘い、わが国の社会、経済、文化の成果をさらに強化発展させ、勤労大衆を啓蒙して科学的知識に

よって武装させ、反帝・反封建革命を深化させ、国家を防衛し、非資本主義的發展の道のために一貫して闘い、人民大衆の權益に敵対する分子のさまざまな陰謀や有害な活動を摘発・粉碎する。」[モンゴル史 1988：433]

という基本的な課題と内容を持っていた。これは、マルクス・レーニン主義のイデオロギーと、そこに基盤を置く党の原則を首尾一貫して守らせるというところに目的があった。更にそれを強化するように1925年からはマルクス・レーニン主義の古典などがモンゴル語で出版されるようになり、イデオロギー教育の面で出版物が重要な位置を占めていたことを示している。特に文学でも、1929年から出版される、詩、短編小説、評論、風刺文の最初のアンソロジーである『文芸の集い（Урану гсийн чуулган）¹²⁾』という小冊子の内容は、

「外国の侵略と戦乱の害毒、聖俗封建諸侯の残忍で狡猾な特質、公務のなかに存在している不正、官僚主義、技術軽視を批判するとともに、革命の勝利、および新時代の革命思想とその性格を普及させ、文学愛好者に協力する」[モンゴル史 1988：440]

という方向性を持っていた。

このような文化教育事業は、1921～1940年までにおいては社会主義への準備のために利用され、また1941年以降はキリル文字の導入とともに、社会主義社会の基盤建設と発展のために大きく貢献していくこととなったのである。

1941年以降の文化教育事業を支えた党のイデオロギー活動は、「愛国的・国際主義的思想、および勤勉な労働と国有財産を保護する道徳によって人民を教育すること」[モンゴル史 1988：226]であった。これらのイデオロギー活動は、将来的にすべての人々が社会主義的な意識を身に付けるよう教育するのに重要な意義をもつことになる。

1949年にはモンゴルの歴史と文学の学校教育における状況に関しての党

の決議が発表された。この決議・決定は、芸術・文学・学校教科書に反映された「反マルクス・レーニン主義的な民族主義をあばきだし、これに鋭い非難を加えるとともに、民族主義のあらゆる徴候と断固として闘い、プロレタリア国際主義とマルクス・レーニン主義の研究方法の基盤に立って社会科学を発展させる原則的な道程」〔モンゴル史 1988：227〕を明らかにしたことになる¹³⁾。

この時代に出版された先述の『文芸の集い』と文学の教科書を比較すると、学校での文学教育と、学校外での文化教育事業が一貫性を持って連動しており、学校教科書にはその他の出版物と同じような党のイデオロギー活動が反映されていることが分かる。

『モンゴル史』にも代表的な文学作品として記述されるTs.ガイタブの「ダムディニー・スフバートル（Дамдины Сүхбаатар）」〔1957〕という叙事詩¹⁴⁾は、D.スフバートルの思想と行動を、「党の発端と強化およびモンゴル人民の闘争と関連づけ、勇敢な愛国者であり、恐れを知らぬ勇気をもって大衆を激励する組織者」〔モンゴル史 1988：239〕として、スフバートルの人物像を描写・創作したと評価されている。当時の教科書にもレーニン礼賛の記述と平行して、スフバートルを英雄として褒め称え、「彼のような立派な人となれ」といった作品が多く見られる。

このようなことから、社会主義時代の学校教育を含む文化教育事業は、党のイデオロギー活動の一環であり、教科書を含む多くの出版物がそのイデオロギー活動を支えていたことが分かる。当時の党のイデオロギーとその活動は、文学の教科書をはじめとする文学作品を軸に展開され、特に学校の文学教育において教科書に反映されるとともに、そのイデオロギーにかなう人物を英雄として具体的に登場させ、「そのような人物のようになれ」とすることによって、英雄の行動や性格を規範とする道徳教育を行っていたことになる。

社会主義時代の文学の教科書に表される「道徳」や「人間の本質」は、党のイデオロギーに裏打ちされた、英雄の人物像を規範にしたものであり、そのような英雄を具体的に登場させることによって、文学教育はより分かり易い形で、党のイデオロギーに沿った「道徳」や「人間の本質」を浸透

させる役割の一端を担っていたと言えるであろう。

3. 民主化以降の教科書

「ソ連の衛星国」「ソ連の16番目の共和国」と言われ、政治経済、文化など様々な面で旧ソ連の影響を受けていたモンゴルが民主化へと動き出すのも、旧ソ連におけるペレストロイカの影響があったからである。1985年に旧ソ連でゴルバチョフ書記長が政権を握り、ペレストロイカを推進すると、それは徐々にモンゴルへも「民主化への波」として影響を及ぼしてくることになる。旧ソ連のペレストロイカが当初、経済改革に主眼が置かれていたように、モンゴルでも国营企業の独立採算など主に経済面の改革が行われていた。だが1988年のモンゴル人民革命党中央委員会（第5回総会）という党の最高議決機関において、「『情報公開』『民主化』『複数主義¹⁵⁾』『チョイバルサンやツェデンバルら旧指導部に対する批判』『肅清犠牲者や党籍剥奪者の復権』『伝統文化と歴史の見直し』などを発表した」〔岡田2003：279〕ことによって、政治や文化面にも改革が行われることになっていった。

特に文学界では、「複数主義」が認められたことによって、政治面でそれまでの人民革命党の一党独裁から複数政党制に移行するのに伴い、「文学はひとつの政党（人民革命党）にのみ奉仕するものではない」として、文学の党支配からの自立を目指すようになった。それまで文学界の基準となっていた社会主義時代の「党派性」などが批判の対象となり、党の検閲制度も廃棄されることになる。また「肅清犠牲者や党籍剥奪者の復権」という党の発表に呼応するように、社会主義時代に「反国家的」な作品を書いたとして文学界から抹殺された作家や作品に対して復権や再評価が次々に行われていっている。

このような政治的、文学的な改革の動きは、それまで党や社会主義体制の思想を伝える役割の一端を担ってきた学校の文学教育にも表れている。1994年以降の文学の教科書からは、社会主義時代の文学の教科書に多く登場した、レーニンやチョイバルサンらを英雄として讃えることによって、社会主義を支える「模範的な愛国者」を育てようとするような記述が削除

されているのである。「革命の父」であったスフバートルに関する記述からは、社会主義時代の「スフバートルのような人となれ」「英雄」「目指すべき人」といった扇動的な言葉が取り除かれ、スフバートルは作家が創作したひとつの作品の中のひとりの主人公として登場するようになる¹⁶⁾。つまり社会主義時代には「党の英雄」や「模範的な愛国者」を讃えるために創作され、教科書に掲載されてきた作品は、民主化以降には完全に削除されるか、または当時の作家が創作した「作品のひとつを紹介するもの」として扱われているのである。

「粛清犠牲者や党籍剥奪者の復権」においては特にチョイノム¹⁷⁾の復権が目を引く。実は社会主義時代と民主化以降を比べても、教科書に掲載されているモンゴル近現代文学の作家たちの顔ぶれは、それほど大きく変化している訳ではない。掲載される作家はほとんど同じで、社会主義を代表するような政治的な作品は他の作品に差し替えられ、自然や遊牧生活や母への愛などをテーマにしている作品は変わらず掲載され続けているのである。その中で新たに教科書に掲載されるようになった作家は、社会主義時代には文学界から抹殺され民主化とともに「反逆の詩人」として注目を集めるようになったチョイノムであった。

チョイノムの復権は、1988年に詩人のスレンジャブ¹⁸⁾が文学芸術新聞¹⁹⁾に掲載したチョイノムに関する回想記事が発端となった[岡田 2003: 288]。以降、チョイノムの一部の詩や回想などが新聞や雑誌、ラジオで紹介されるようになり、多数の未発表の詩を収録した詩集『寺院の石(Сүмтэй бударын чулуу)』が1990年に出版されている。それまでモンゴルの文学史から抹殺されており、現在でも書籍の出版流通が整備されていない状況において、復権の兆しからわずか1年半ほどでチョイノムの詩集が出版されたのは、まさに異例というべき早さであった。このような異例の早さで詩集が出版されたことが象徴するように、その後の民主化運動の激化とともに、チョイノムは民主化運動のシンボリック的存在となっている[岡田 2003: 288]。このような動きは文学の教科書にも反映されることとなる。1994年の10年生用の教科書には、初めてチョイノムの生涯と作品に関する記述が10ページ以上にわたって掲載されており、更に1997年の10

年生用教科書でも他の詩人の詩が1～3編ほど掲載されているのに対し、チョイノムは6編もの長短の詩が掲載されるなど、急激に注目をあびていた。現在では中学の教育要綱（2004年度版）に、彼の詩の「青春（Залуу нас）」（1961）が学ぶべき詩として推奨されるとともに、その他の作品も頻繁に教科書に掲載されており、既に「国民的詩人」としての地位を築いているといえる。

政治犯として逮捕、収監された後、チョイノム自身と彼の作品はモンゴルの文学史から抹殺されていたが、逮捕される以前に発表された作品は文学界で高い評価を得たこともあった。そのことを考えれば、民主化以降、チョイノムの復権が望まれ、彼の詩が再評価されたのは当然のことかもしれない。しかし、民主化への移行やそれに伴うチョイノムの復権は、国民の間から出た運動ではなく、常に党や党の指導を受けていた作家同盟による運動であった。社会主義時代に社会主義のイデオロギーや党の理念を普及させるために、文学の教科書には多くの「英雄」が登場していた。それに代わるように、民主化への国民の意識を高めるために、民主化の象徴としてのチョイノムが注目され、文学の教科書にも掲載されるようになっていったのではないだろうか。

チョイノムは、社会主義時代にみられた「国家に貢献した」「社会主義の立役者」の「英雄」たちのように、彼自身の功績を讃えられて民主化の象徴となったわけではない。社会主義時代の犠牲となったが、民主化によってもたらされた「過去の反省にたった自由な批判精神」[岡田 2003: 289]の賜物として現代に甦った、いわば民主化の精神を象徴するために必要な人物だったのである。それは文学の教科書において、「社会主義の英雄」が社会主義や党の思想を普及させたのに取って代わり、「民主化の象徴」が民主化への移行に必要な思想を普及させる役割を担わされていると考えられる。

同じようなことが「伝統文化と歴史の見直し」という党の発表に基づく、文学界の伝統回帰の風潮にも表れている。プレブドルジ²⁰⁾の「チンギス（Чингис）」は1960年代初頭に短い間に訪れた「雪解け」の時期に書かれた詩である。「チンギス・ハーンは過酷な戦いが日常であった時代に、歴

史の必然性が生み出した」[岡田 2003: 29]とうたうこの詩は、社会主義時代に「残虐な侵略者」としてタブー視されたチンギス・ハーン像を覆すものであった。わずかな「雪解け」の期間に書かれたこの詩は、その後の社会主義の中では受け入れられず、文学の教科書にもプレブドルジの他の詩は掲載されても、この詩だけは掲載されなかった。この「チンギス」という詩が教科書に掲載されるようになったのは民主化以降で、現在の中学用の教育要綱（2004年度版）では学ぶべき詩として推奨されている。

「チンギス」の詩に限らず、社会主義時代には単に歴史書の一つとして簡単に扱われていた『元朝秘史（Монголын нууц товчоо）』は、民主化以降には「最も古い歴史書のひとつであり、チンギス・ハーンに関する歴史を語ったもの」とモンゴル文学の礎として記載されている。また社会主義時代には記載の無かった、シャーマンが儀礼の際に使用する言葉で、口承文芸に位置付けられる“Бөөгийн дуудлага（シャーマンによる召喚）”などが民主化後、新たに記載されるようになっている。

このようなチンギス・ハーンの復権や「民族主義的」な題材の復活は民主化以降のモンゴル文学界の特徴であり、それが文学の教科書にも反映されていると考えてよいであろう。社会主義時代にタブー視され、語ることを許されなかったものが、民主化後に抑圧されていたものの反動として、急激に表面化し文学界に限らず様々な場で表現されるようになっていったのである。しかし「民族主義的」なものへの回帰は、社会主義的な思想が削除された文学の教科書において、新たに国民をひとつに纏め上げる「装置」としての役割を果たすことを期待されたのではないだろうか。

II. 文学教育の実践

本章では社会主義時代と、現在の学校で実際に行われている文学教育の様子について記述していくが、その補足として、現在のモンゴルでの文学教育の一般的な現状を述べておきたい。なぜなら現在モンゴルは高学歴化の道を歩みつつあり、その一端として、数学や科学など理系や語学の授業に力が入れられる反面、文系や芸術（音楽・美術）科目などに関しては削

減されている傾向があるからである。今回調査を行った3校の学校においても、1週間の授業のうち文学の授業は平均して2コマであった。これは例えば算数や数学の授業が平均4～5コマあるのに対して約半分の授業数しかないことになる。このような傾向は各教科の教師数にも表れている。下記の【表Ⅱ-A】を参照されたい。

	1980年度	1985年度	1990年度	1992年度	1994年度	2004年度
国語・文学	1715	1989	2316	2142	1844	1992
歴史	738	868	897	357	353	295
数学・物理	2018	2596	2918	2627	2431	2495
英語	資料ナシ	資料ナシ	資料ナシ	243	283	921
教師総数	9456	12027	14712	13276	12372	20792

【表Ⅱ-A】年度別、科目別教師数（人／単位）：筆者作成

“БОЛОВСРОЛ 1980～1995 он” Монголын улсын Шинжлэх ухаан, Боловсролын яам : 1996

“Боловсрол, соёл, урлаг, шинжлэх ухаан, технологийн салбарын статистикийн Мэдээллийн эмхтгэл” Боловсрол, Соёл, Шинжлэх ухааны яам : 2004 参照

1980年度と2004年度を比べると、国語・文学の教師は277人増で、数学・物理は477人増となっている。またその増減が顕著なのは歴史と英語²¹⁾であろう。

現役文学教師たちも「週に2日だけでは授業を深められない」「最近の生徒はただでさえテレビなどを見てなかなか本を読まないのに、授業まで削減されてしまうと、ますます文学に対する意識が低くなりそうだ」などと語っていた。

生徒数の増加に学校数の不足、文系離れが進み、理系科目が優勢となりつつある現在、以前のように文学教育が国民形成の中心として、圧倒的な影響力を持っているとは言い難い状況かもしれない。今後どのような教育方針がとられていくのか、また授業数が削減された中でも、文学教育としての役割を果たすためにどのような工夫が凝らされていくのかは、これから注目していくべき課題であろう。

1. 社会主義時代の学校

ここでは社会主義時代に学校に通っていた人々に、当時の学校生活や文学の授業について聞き取り調査を行ったものを中心に述べていく。インフォーマントたちは約10年から30年前に社会主義下で学校教育を受けていた訳だが、彼ら・彼女らの記憶に一番印象的に残っているのは、文学の授業の一環として行われた詩の朗読大会や戯曲の発表会であった。通常の教科書を読むだけの受動的な授業形態に比べ、能動的な行為を伴っているので記憶に残りやすかったかもしれない。大小合わせて非常に多くの大会や発表会が、学校内や学校対抗という形で行われていたようである。

現在の文学教育の場でも、詩の朗読や課外活動における生徒による戯曲の上演などは行われているが、社会主義時代の方が、現在よりも頻繁に行われていたと考えられる。その背景には、これらの活動を通して、党のイデオロギーに叶う優秀な人物を選出し表彰することによって、全体の意識を向上させ、身近なところから英雄を輩出し、その英雄像を国民自らに反映させやすくする効果を期待していたことがあるだろう。

インフォーマントB氏は4年生の時に上演した「フレン・モリ（赤褐色の馬）²²⁾」という戯曲について、このように述懐している。

「(劇中に登場する) お坊さんに、とにかく腹がたちました。お金目当てだったりする態度や、『(主人公の) 母親がこんなに若くして悪い病気になるのは、お祈りをしなかったり、宗教的に偉い人を尊敬していないから』だって(そのお坊さんは) 言うのだけれど、そんなことは絶対にあり得ないことでしょうか? 何てバカなお坊さんだと思って、腹が立ちました。」(インフォーマントB氏)

彼女の印象に残っているように、この作品は社会主義の準備期間において盛んに取り扱われた、仏教の理念と仏僧を批判した作品である。社会主義時代にイデオロギーの方向性としてこのような作品が支持され、教育現場で扱われるのは当然のことかもしれないが、実はこの作品を彼女が学習したのは、民主化への移行が始まった頃であった。

民主化以降は仏教はもとより、チンギス・ハーンやウイグル式モンゴル文字などの、いわゆる社会主義時代に「民族主義的」なものとして批判され続けてきたものが、政治体制の変化に伴い見直され、評価されなおしている。特に民主化直後には「民族主義的」なものへの求心力が高まり、急激なナショナリズムの高揚がみられる。そのような時期に、社会主義時代に文化教育事業の中核を担っていた学校教育において、未だ「民族主義的」なものを批判するような内容の授業が行われ続けていたのである。

このような事例は、彼女のように社会主義から民主化への移行期と、学生時代が重なっていた人々に多く見られることである。その原因の一つとして、教科書の改訂が間に合わなかったことと、新たな教科書を出版し、それを購入する経済力が国にも国民にもなかったという経済的な側面をあげることができる。現在でも、古本市場では使い古された教科書が売られ、新学期には新学年の教科書を求める親や子供で市場は溢れかえる。もちろん新品を売る書店もあるが、経済的な事情から新品の教科書を購入できる人は一握りである。

「だって使っていた教科書が同じものだったから。そのまま（社会主義時代の）教科書を使っていたから、教わることは変わらないでしょ。同じ教科書を何年も使い続けているから、その中に書いてあることも、教わることも、（社会主義時代と）そんなに変わることはなかったです。」（インフォーマントB氏）

B氏の言うように、特に民主化への移行期には経済的な混乱もあり、それまでと同じ教科書を使い続けることに違和感はなかったのである。

結局のところ政治体制が変化してもその政治の中枢を担い、また学校で教鞭をとり続ける教師たちは、みな社会主義時代に教育を受け、中には旧ソ連などの旧東欧圏で教育を受けた者もいたため、国全体の動きとしては民主化への移行と共に、急激な「民族主義」への回帰があったとしても、社会主義時代の教育やそれに付随するもの全てが切り捨てられ、革新されたとはいえない状態であった。学校教育の内容や教科書の変化は、学外の

急激な変化よりも遅れる形で、徐々に現れていくことになったのである。

現在でも社会主義時代の教育との共通点が幾つか残っている。その一方で、大きな変化も見られる。例えば、文学教育そのものに対する扱い方である。現在モンゴルでも「より良い大学へ、より良い教育を」という意識のもと、日本の受験戦争のような、高学歴志向が表れてきている。その中で、文学教育のような道徳的・情操教育的な意味合いを持つ教科が削られる傾向にある。社会主義時代もエリート教育のような選抜方式の教育体系がとられ、授業内容や教師の態度も今よりももっと厳しいものであったと言うが、文学教育はイデオロギー教育の一環として位置付けられていたため、寧ろ強化される科目であった。

また生徒たちが上演する戯曲などに関しても変化は見られる。後述する私立H学校の発表会では、友情や親子間の愛情など、身近な愛情や道徳的規範を扱うものが大半であった。それに対し、社会主義時代に表現されていたのは、宗教批判や政治体制への賛同、スフバートルら英雄に対する賞賛といった、寧ろ全体をつなぐもの、全体への傾倒といった、党を中心とするイデオロギーが示す道徳的な規範である。民主化以降全体から個々へと道徳的な規範を表現する形も変化しているといえるであろう。

2. 私立H学校

a) 学校概要

私立H学校は1994年に創立された、ウランバートル市スフバートル地区にある10年制の私立学校である。この学校は民主化以降現れてきた私立学校のひとつになる。生徒数は約300人で、1学年1クラス制で各学年は約30人ほどである。帰国子女を積極的に受け入れ、英語による授業を取り入れるなど英語教育に熱心な学校である。生徒の中には、ロシア、韓国などで生活してきたため、モンゴル語を上手く解することができず公立の学校へは行けないので、英語教育に熱心なH学校に通学している者もいる。授業は40分を1コマとして、1～5年生が基本的に8時30分から13時55分まで7コマの授業を、6～10年生が8時30分から15時25分まで9コマの授業を月曜日から金曜日まで受けている。例えば4年生の時間割は以下の通

りである。【表Ⅱ-B】

	月曜	火曜	水曜	木曜	金曜
8:30～ 9:10	算数（英語）	保健	算数（モンゴル）	文学（モンゴル）	文学（モンゴル）
9:15～ 9:55	算数（英語）	算数（英語）	モンゴル文字	ロシア語	物理
10:00～10:40	体育	英文法	生物	コンピューター	ロシア語
11:00～11:40	文学（英語）	算数（モンゴル）	歴史（英語）	コンピューター	歴史（英語）
11:45～12:25	国語	文学（英語）	歴史（モンゴル）	IQテスト	美術
12:30～13:10	物理	算数（モンゴル）	算数（英語）	水泳	英文法
13:15～13:55	国語	モンゴル文字	算数（モンゴル）	水泳	文学（英語）
14:00～14:40		音楽	地理	歴史（モンゴル）	道徳（課外活動）
14:45～15:25				歴史（英語）	

【表Ⅱ-B】H学校4年生時間割（2006年2月）：聞き取り調査により筆者作成

*算数、歴史、文学に関しては、同じ内容を英語とモンゴル語両方で行う。

科目後ろのカッコ内の言語。

H学校の授業料は年間600から700ドルである。公立校が授業料無料（必要経費はかかる）なのに対して、非常に高額であるといえる。しかし生徒数は公立より少なく、授業数や内容也多岐にわたり充実している。帰国子女だけでなく、よりよい教育を求める親たちによって、このような私立学校の需要が高まっていることは確かである。

今回の調査では、6～10年生のモンゴル文学とモンゴル語の教師（両科目を兼任している教師は多い）であるS氏の協力を得て、S氏が文学を担当する10年生とS氏がクラス担任を勤める4年生を対象に、実際の授業での参与観察やインタビュー、アンケートなどを行った。

b) 授業形式

10年生のクラスは週に3回文学の授業（モンゴル語による）がある。このクラスを担当するS氏と生徒たち（男子10人、女子12人）の授業風景を記述しながら、授業形式を説明していきたい。

授業は約2週に1回の講義とそれ以外は演習で構成されている。教師が主導となって単元ごとに作家や作品に関する講義を行う。それが終わると

次の回からはしばらく生徒の報告会となる。この報告会は講義で習った内容をもとに、教科書や副教材を使って作家の経歴や作品の主旨をまとめ、その内容を記したノートを提出すると共に、授業時間を使ってその内容を暗記して教師の前で報告するという形式である。副教材には作家の選集本や文学選集などをS氏が推薦していた。年間を通じ、あらかじめS氏がたてた授業計画に沿って、必ず読まなければならない作品や作家をいくつか生徒に提示をしておく。必修のこれらの報告とテストによって成績をつけるが、報告は学期内ならいつでもよく決められた回数をこなせばよいことになっており、個々のやる気と能力によって報告会での進捗状況は違うものとなる。

ある日の授業では、40分の授業のうち報告者はたった2人であった。どちらの報告者とも成績優秀らしく、他の生徒に比べて発表時間も長く、発表内容もしっかりと纏まっているものであった。S氏が報告の途中や最後に「この作家の他の作品には何があるか」「この作家の書いた詩で覚えているものがあれば暗唱してみなさい」などと質問をはさむ。この日の報告者たちは、S氏の要求に応えられていたが、別の日の報告者であった男子生徒はほとんどの質問に答えられず、S氏が同じ質問を教室内の生徒全員に問い掛け、挙手させて答えを導き出させていた。

この報告会の最中、他の生徒たちは各々、自分の報告内容を纏めていたり、他の教科を勉強したり、またヒソヒソと私語をしている者も多かった。比較的自由的な雰囲気で行われるこの授業では、よほどうるさくならない限りS氏は生徒の自由にさせているようであった。このS氏が生徒をしっているのを見たのは1ヶ月のうち2、3回であった。原因はどれも生徒どうしのケンカであって、授業の態度や報告内容に関してS氏が生徒をしめることはなかった。これは自由的な雰囲気の授業ではあるが、生徒が教室内では節度をわきまえている態度を取ること、個々の能力の差はあっても、最終的に全員がA（最高位の成績）を貰うほど努力をしているということにある。「先生は怖い。勉強は面倒くさい時もあるけれど、やらなければならない」と生徒が語ったように、教師に対する態度や教室内での態度、授業に対する取り組み方などに、暗黙のルールがありそれが守られている

ようであった。

このような授業形式をなぜとるのかとS氏に聞くと、「10年生は今まで、たくさんの作家や作品について既に十分勉強をしてきているから」という。作家やその時代背景についても一度復習するとともに、教科書の掲載スペースには限りがあるので、そこに載っていない代表作品を副教材から学ぶことができるというのである。4年生のクラスでは教師の講義が大半を占め、その中で宿題として覚えた詩などの全編や冒頭部分を生徒がクラスで暗誦するという形式をとっていたので、この10年生の文学の授業は、今まで学んできたこと全てに対する総復習の時間であると言えるであろう。

c) 課外授業

社会主義時代に多く見られた文学の授業の一環としての詩の朗読会や、文学作品を題材にした演劇発表会を、H学校では行っていない。しかし代わりに道德教育の一環として、生徒に文学作品をもとにした作品を演じさせたり、課外授業として歌や詩の発表会を行っていた。また「ロシアの日」「アメリカの日」などが設けられ、ロシア料理などを皆で作り、ロシア語の歌をうたったり、ロシアの詩をロシア語で朗読したりしていた。

これらの発表会は学年ごとに数グループ対抗の形で行われたり、低学年の部・高学年の部で分けられて、各部で学年対抗の形式をとって行われていた。審査は校長を含む数名の教師が行うこともあれば、他学年の生徒が数人で行うこともあった。

この課外授業では、どのような文学作品を演じるか、どの詩を朗読するのか、どの歌をうたうのかは生徒たち自身が決めることになっている。基本的に教師は「審査をする」立場であって、生徒たちに対して講評はするが、練習段階で指導することはない。ただし文学の授業中は、詩の朗読の仕方や、戯曲に対しての講義を行っている訳であるから、それを踏まえた上で生徒たちは行動していることになる。

4年生のクラスで、歌と詩と演劇の発表会が行われた時、歌は英語やロシア語の歌を選曲する生徒が多かったのに対し、詩は教科書で習うモンゴル近代文学の詩を選ぶ生徒が多かった。なぜ詩はモンゴルのものを選ぶの

かという質問に対して、「モンゴルの詩は一番きれいで、朗読しやすいので」と答える生徒が大半を占めた。また、この発表会での演劇は、生徒たちが自ら考えた短い戯曲を演じることになっていたが、ひとつのグループが童話「3つのお願い」をモチーフにした以外は、他のグループは「母と子」「クラス内での友人どうしのケンカ」「友だちとケンカをした時に仲直りをする方法」など、身近なテーマで作品を作り上げていた。

このような発表会の他にも、生徒が企画して教師に頼んで行う料理教室（ロシア料理など）などもあり、教師主導の時間と、生徒主導の時間が学校内で上手く使い分けられ、自由な雰囲気ではあるが学校内でのルールが守られているようであった。

d) モンゴル文学についての生徒たちの意識

生徒たちにアンケートや、それを元にして教室内で話を聞いていくと、ほとんどの生徒たちが「モンゴル文学、特にモンゴル近代文学は好き」であると回答していた。ただし、それは授業で教科書で習う作品に対しての評価が「好き」「素晴らしい」というものであって、学外ではほとんど本を読まないという生徒が大半であった。更に本を読む生徒のうちの多くは外国文学をモンゴル語訳したものを好んで読んでおり、モンゴル近代文学は授業で習うものという意識が強かった。

それでも文学の授業に対しては「たくさんの作家や作品に触れることができる」「モンゴルの詩や作品を読むと落ち着く」など興味を持つ者が多かった。学外で自発的に本を読まない代わりに、「授業をしっかり受けていると、面白い作品がたくさん出てくるので、それを教科書や副教材の本で読むだけで十分」と、文学の授業は普段少ない読書の時間を解消するものであるという認識があるようであった。

3. 公立N学校とT学校

a) 学校概要

公立N学校はウランバートル市スフバートル地区にある10年生の学校である。その前身は1923年に創立され、モンゴルの公立学校の中で最初に開

校した中学校である。現在、ウランバートル市の中で進学率、成績ともにトップクラスの学校である。市内の数学オリンピックでも優勝者や入賞者を多く輩出している。1クラスは40～50人で、1学年に4～5クラスがある。授業は1～5年生までが午後の部で、6～10年生までを午前の部で教えている。公立校はどれも生徒数が多いので、それを解消するために、小学生までと、中学・高校生を分けて、午前・午後で授業を行っている。中学・高校生は8時30分から13時55分までが授業時間となり、1日6～7コマの授業を受けている。1コマは40分で、授業は月曜から金曜日までである。同市内のチンゲルテイ地区にある公立T学校のシステムもほぼ同じである。T学校は市内の公立校の中では中堅のレベルである。T学校の2年生の時間割を下記に示した。【表Ⅱ-C】

	月曜	火曜	水曜	木曜	金曜
13:15～13:55	国語	文学（読み方）	体育	音楽	文学（読み方）
14:00～14:40	算数	国語	国語	算数	算数
14:45～15:25	文学（読み方）	算数	理科	社会	国語
15:30～16:10	美術	理科	美術	保健	体育

【表Ⅱ-C】T学校2年生時間割（2006年2月）：聞き取り調査により筆者作成

生徒数の多い公立の学校では、基本的に午前の部と午後の部に分かれて授業を行っている。そのため授業時間がどうしても私立学校よりも少なくなってしまう。最高学年においても1日6～7コマ程度の授業数しかない公立校と、9コマある私立校では授業内容などに差が出る結果となってしまうであろう。それでもN学校のように補講や選抜クラスなどを設けるとことで、学力のレベルアップを図っている公立学校もある。公立校は小学部に就学する際には、基本的に住居が所属する学区内の学校に行くことになっているが、中等部や高等部へ進学する際にテストなどを受けてよりレベルの高い公立校へ編入することはできる。10年制（2005年度9月より11年制）の教育システムであるが、10年間一貫教育な訳ではないということである。

今回の調査では中学、高校の部を教えているモンゴル文学とモンゴル語を教えている教師数名に協力を得て、授業に参加しインタビュー及び事前アンケートを行った。

b) 授業形式

N学校において6～10年生の文学の授業は週に2回行われている。その授業は講義形式が主であり、教科書を主に使っている。特に決まった副教材はないが、『文学精選集（Уран зохиолын дээжис）』の中から教師が選んだ詩や小説を、その場で朗読したり、生徒に読ませることが何度かあった。N学校、T学校共に授業は教師主導であり、H学校の文学の授業のように、生徒主導で演習形式の授業をすることはなかった。教師の質問には挙手で答えさせる場合もあったが、ほとんどの場合、クラスの生徒全員で声を揃えて答えさせていた。教室内は満員で生徒数も多いことから、あまり自由な形式で授業を行えず、全体の統制を取るような態度で教師が授業に臨んでいた。

T学校の教室内で放課後、2年生の担任で文学教師のA氏にインタビューを行ったことがあった。授業は終了していたが、生徒たちはその日のうちに提出する、国語の書き取りの課題を教室内で行っていた。課題ができた生徒から、その場でA氏に見せて合格すれば下校ということであったが、既に放課後で自習時間であったにもかかわらず、教室内は静かで生徒は黙々と課題に取り組んでいた。A氏はその場で生徒が見せてくる課題をチラリと見るだけで、ほとんどチェックをしない。場合によっては「できました」と生徒がノートを持ってA氏に近づくと、ノートを見ずに「帰ってよい」と言うこともあった。課題をチェックしないのかと訊ねたところ「(課題を)やり遂げるということに意義があって、その内容はあまり問題にはしない。生徒は私が怖いから嘘を吐いてやってないのに『やりました』とは言わない。」と答えていた。確かにN学校、T学校共に教室内の印象として、生徒は静かに教師の話を聞き、教師の指導に素直に従うという態度を生徒たちはとっていた。またその質問の答え方、答える内容などもほとんど大差がなく、「模範的」もしくは「均一的」な受け答えをする生徒がほ

とんどであった。

例えばH学校においてモンゴル近現代文学に関する質問を行った時には、生徒たちは「モンゴル人なら誰でも好きだよ」という決まり文句で答えた後で、「でも自分は～だけど」など、自分の意見をかなり積極的に言うという姿勢がうかがわれた。しかしN学校やT学校では「モンゴル人なら～だ」といった全体的な意見に終始し、積極的に個人的な意見を言いたがる生徒は少なかった。

このようなことから、人数、クラス数などが違うということも理由と考えられるが、どちらかと言えば自由で発言のバリエーションも多様であったH学校に比べて、N学校とT学校においては教師主導で統一性を図って、クラスを維持させていく授業方針がとられており、学内における生徒たちの行動もそれに準じていると考えられる。

c) 生徒の詩

N学校での調査中、文学教師のM氏が生徒の書いた詩を見せてくれた。「一番出来が良い」とM氏が評価した詩がある。

Ховдод байхдаа би хайгаас илүү Туулыг биширч явдаг байлаа
Хотод ирээд би хогтой уснаас өөрийг харсангүй ээ
Хөдөө байхдаа би юнаас ч илүү Туулыг үзмээр байлаа
Хөгжил дэвшилд танилцаад хөлийн уснаас өөрийг олсонгүй ээ

ホブドにいた時 僕は 素敵に輝くから トーラ河が好きで通ったもの
だった

街に来て 僕は 汚れた水に 僕自身を見られなかったんだ
田舎にいた時 僕は 何があっても 素敵なトーラ河が見たかった
希望は未来で出会えるけれど こんな水からじゃ 僕自身を見つけられ
ないよ

(13歳男子生徒の詩・筆者訳)

この詩は、自分の故郷であるホブドにある河の美しさと、都市であるウランバートルに出てきてその川の水の汚さに、自分自身も見失いそうだとたっている。頭韻・脚韻・対句といった技法を上手く使い、更にその内容も自らの葛藤を自然に象徴するという、M氏がこの詩に対し高い評価を下しているように、詩として非常に完成された作品であると考えられる。M氏は生徒の作品を多く見てきているが、

「この詩のように、自分の故郷の自然を書いたり、都会育ちの自分が田舎に行って自然に感動したとか、まだ見ぬ自然の雄大さに憧れて、そのような内容の詩を書く生徒は多い。」（インフォーマントM氏）

と言う。著名な詩人たちがモンゴルの自然をうたい継いできたように、それを習い、見聞きする生徒たちも同じようなモチーフを用いて、自らの心の中を作詩していつている。このような自然をうたう詩、また国家を愛する詩がモンゴルには非常に多く、それは既に詩の「定型」として存在していると考えられる。

Ⅲ. 文学教育における詩の実践 ― 朗読という技法を中心に ―

これまでのことから、モンゴルにおいて学校の文学教育は道德教育的な役割を担い、その道德的な価値観を示す政治体制と深く関係していることが分かってきた。では文学の基本とされる詩は学校の文学教育とどのように交わっているのだろうか。この課題について考察する際に、詩の身体化ということが手掛かりとなる。つまり韻文というジャンルの詩に、朗読というパフォーマンス性を取り入れた授業形態に注目していく必要がある。そのため本章では、まず詩と韻文の関係性を明らかにし、そこから詩を朗読するという行為が文学教育でどのような役割を担っているのかを示していくこととする。

1. 詩と韻文

モンゴル文学は口承文芸という形で、長い間声によって担われてきた。更には時代を経るにしたがって、その声によって伝えられた口承文芸の作品が書き取られ、また声によって伝えられていくという相互補完的な関係をも築いてきている。つまりモンゴル文学は口承文芸それ自身と、それを書き取る書写文学の両面から成り立っていると考えられる。

口承文芸が発達したのは、識字率が低かったことや出版メディアの発達の遅れなどが関係している²³⁾。一方で出版メディアによる近代的な文学の発生過程において、それまでの書写文学と口承文芸が補完的な関係にあったことなども作用し、口承文芸の要素を近代文学に活かしていこうとする考えが非常に強かったことも理由の一つとなる。

一口に口承文芸と言っても様々なものがあるが、口承文芸における重要な要素は韻文であると考えられる。モンゴルでは諺、格言、世界の三つ²⁴⁾、歌謡、儀礼、シャーマニズムに関すること、祝詞、讃歌に至るまで、全てが韻文のジャンルに属している。また伝説や神話、故事、昔話、英雄叙事詩といった口承文芸には、韻文を使用した詩や格言、歌謡などが織り込まれており、口承文芸と韻文は切っても切り離せない関係を築いている。

チンギス・ハーンにまつわる歴史を記した『元朝秘史』は、モンゴルで最も古い部類の書写文学である。同書は、散文を基本としているが、各所にそれまで口承文芸として伝承されてきた韻文を、散文と散文の間に配するという形式で叙述している。例えば同書の第2巻72節では、チンギス・ハーンの父が死亡したことによって、その支配下にあった者たちがチンギスや彼の母の元を離れていく際に言った言葉が、韻文形式で記されている。

「Цээлийн ус ширгэв

Цэгээн чулуу хагарав」²⁵⁾

「沢の水は涸れてしまった

固い石は砕けてしまった」

この韻文は「沢の水は涸れない 固い石は砕けない」という不変性を示した格言を受けており、ここではチンギス・ハーンの父という部族の長が亡

くなったことによって、長という強力な権力者と、それによって纏められていた部族が崩れてしまった様子を格言を比喻として使うことで表現している。

韻文形式で伝えられる言葉の背景には、上述の格言などに見られるような、モンゴル人のものの考え方、風俗、習慣などが存在している。韻文は他民族との戦闘から、狩猟や牧畜といった生業形態、宗教観などに至るまで、それぞれの時代を反映した内容の作品を伝えてきた。1940年代までに識字階層はごく一部に限られており、それ以外の多くの人々は口承文芸、韻文が伝えるもののみが文学であり、娯楽であり、情報源となっていたのである。

口承文芸の根幹とも言うべき韻文であるが、それが一番意識されているのが詩の分野であった。現在でも散文形式の詩より、韻文形式の方が人気があり作品の評価も高くなる。韻文形式を受け継ぐ詩によって、人々は現在に至るまで人生の喜びや悲しみ、父母や恋人など人を愛することなど様々なテーマを、生活の中でうたい継いできたのである。

1921年のモンゴル人民革命以降、党の指導者たちは革命や社会主義などの新しい思想を国民に伝える必要があった。その中で利用されたのが、韻文形式の詩や歌、祝詞や讃歌といった文盲の人々にも伝達可能な口承文芸だった。特にこの頃、革命を担う若い世代の青年たちによって、新しい思想の盛り込まれた詩が盛んに発表され、普及し始めたラジオを通じて放送されたり、集会の席上で朗読されて広まっている。識字運動が進み、識字率が向上した後も口承文芸の手段によって、新たな思想が伝えられていくのである。人々の生活に韻文や詩が浸透し根付いていたからこそ、近現代においても新たな思想を普及させるために、韻文や詩が利用されてきたといえる。

このようにモンゴルの近代文学は口承文芸と書写文学の双方を基盤として成立してきた。口承文芸における韻文の形式は、それぞれの時代を背景にして、モンゴル人の生活、風俗、習慣、宗教、価値観などを伝えてきた。つまりモンゴル文学の根幹とも言うべき韻文と深いつながりのある詩は、モンゴルのさまざまな世界観を表し伝えると同時に、モンゴル文学の基礎

でもあり、人々の生活に根付いたものなのである。

2. 詩の朗読

口承文芸が韻文形式をとる背景には、「韻律の定型性が、それに合う言語音を制約すると同時に、記憶喚起を容易にして、一定の連鎖となったことばの反復をうながす」[川田1992: 85]のように、韻文を用いることによって伝える内容を覚え易くさせるための工夫がある。先項で述べた韻文の技法は、口承文芸にひとつの型を作り出すことによって、覚え易さと伝え易さを生み出していることになる。だが韻文にはまた別の効果もあると考えられる。

口承文芸は元来「声の文化」であった。そこで伝えること、覚えることはすべて口伝、声を通して行われていく。つまり口承文芸において重要な位置を占める韻文は、発声するという前提で作られていると考えられる。その発声することによって語られる口承文芸や韻文は、「声の技術」[上村1999: 66]と「言葉の力」という二つの要素によって支えられていると考えられる。

まず「声の技術」であるが、モンゴルでは声に出すということ、声の持つ力というものは、しばしば口承文芸の中で強調される技法として示されてきた。英雄叙事詩をホーミーに似た独特の低い声（喉歌）で語る方法や、語りと語りの間奏にホーミーが歌われることもあるなど、喉歌やホーミーは「声の技術」として捉えられてきている。また口承文芸には含まれないが、家畜に対する「かけ声（calling）²⁶⁾」にみられる、声を使って家畜とのコミュニケーションを図る方法などもある。これは家畜の野性に対して、人間が声そのもので対象を操作しようとする「声の技術」であると考えられるだろう。このようなことから、声には力や魅力があるものと捉えられていることが分かる。

また「言葉の力」を考える場合には韻文の存在がある。韻文を声に出した場合、韻文としての完成度が高ければ、聞いていてよく耳に馴染み、また美しい旋律を発声することができる。韻文形式の作品に高い評価が与えられるのは、そのような旋律の美しさをも表現できることに通じているか

らだろう。口承文芸全般に使われている韻文には、非常に完成度の高いものが多く存在している。韻文の完成度の高さというのは、よく使われる単純なまじないの言葉や祝詞の有効性、現象を操作する言葉の力というものを裏付ける意味を持つと考えられている。つまり完成度の高い韻文の旋律の美しさ、その美しいとされる言葉の集合体であるからこそ、まじないや祝詞の有効性を高める効果があるとされるのである。このようなことから口承文芸は、韻文によって形作られた「言葉の力」に、更に「声の技術」を付加することになると考えられる。

韻文と深く関わる詩も、同様に声に出して朗読することを前提として作られていると考えてよいであろう。これは現在でも盛んに行われる詩人のコンテストが、聴衆の前で自作の詩を読むという形で行われ、詩の朗読のCDが売り出されているという状況にも現れている。詩は口承文芸がそうであるように、声の質や身振り手振りによってどのような雰囲気を作り出すのかといった、パフォーマンスの形が前提となって作られているのである。同時に、現在でも多くの詩人たちが、まじないや祝詞と同様の韻文の技法を使い続ける背景には、モンゴル人の生業形態である遊牧や狩猟、風俗習慣や生活儀礼などの、生活に密着した口承文芸などにみられる、「言葉の力²⁷⁾」を利用している側面があるとも考えられるであろう。詩は韻文のよる「言葉の力」を持つと共に、それを朗読するという身体的なパフォーマンスによって「声の技術」を付加し、より「伝える力」を強化していると考えられる。

3. 文学教育と詩の朗読

文学の教科書に必ず掲載されているナツァグドルジ²⁸⁾の「我が故郷²⁹⁾」という詩を例にすると、「我が故郷」を勉強する際の課題として以下のような記述が教科書になされている。

課題

1. 「我が故郷」という詩を読んで、「祖国」とは何であるか、「祖国」はどこから、何から始まっているのかを話し合いなさい。モンゴル人が

- 「私の生れ落ちた地、洗った水³⁰⁾」と尊重する意味を説明しなさい。
2. あなたたちの生活している場所（故郷）が、この詩のどの箇所にどのように描写されているか、見つけなさい。
 3. 祖国のために（危険に）身を投げうった（献身的だった）勇気ある英雄たちに、誰を知っていますか？あなたの故郷、系図（家系）から、「侵略者たる敵が来るなら、ただちに（蹄で蹴って）追い出す」国民、英雄と言われた人は生まれましたか？
 4. （この）詩をクラスで（美しく：詩を読むように）朗読し、暗記しなさい。
 5. ダムディンスレンの「ヘンティの高い山々」の旋律、チョイドグの「モンゴルの美しい国（地）」の映画音楽から、前学年で習ったことを思い出しましょう。³¹⁾

課題4にあるように、モンゴルの文学教育では、詩を暗記していかに美しく朗読するかが必須となっている。それは韻文が常に朗読するというパフォーマンスを前提として書かれていることにも由来している。実際の授業で生徒が詩を朗読するのを聞いた際も、また文学の教師が生徒に詩の朗読を指導する際も、「いかに美しく読むか」「『韻文を読むように』読む」ということが大事かということが強調される。それは感情をこめて読むということだけではなく、連や節の区切りの部分の意識、声の高低、速度、どの部分を強調するかといった、細かな部分にまでこだわり、独特の節回しで朗々とうたいあげられる。

「先生が言っていました。普通の本を読むのではなくて、『詩（韻文）』を読んでいるように言いなさいって。詩の中で（言葉を）それぞれ分けて、どこで声を高くする、どこを強調して、この部分を強く、身振りもつけてこういうように（両手を胸の前に交差させて、右手を広げ、左手を広げ）・・・。」（インフォーマントB氏）

インフォーマントB氏が自分が生徒時代に習った朗読の方法を教えてください

たが、彼女の朗読の方法は、身振り手振りに至るまで、現在学校に通う生徒たちが授業中に行った朗読の方法と全く同じであり、テレビやCDなどで見聞きする詩人たちの朗読法も変わらないものである。

韻を踏むという音声的なリズムと、詩を読むリズムが重なり合うことによって、モンゴル人にとって慣れ親しんでいる、一つの型とも言える詩を朗読する際のリズムができていくわけである。この朗読法というリズムを修得するのが、学校の文学教育、文学の授業なのである。

このようにして覚えられた詩は、身体化していると言えるであろう。他の授業でも、例えば歴史の授業などでも暗記をすることは求められるが、単に暗記をしたものに比べ、詩の朗読ようにパフォーマンスを伴った暗記の方法は、記憶を甦らせたり、より鮮明に記憶を残していく。社会主義時代に生徒だったインフォーマントの多くは、既に学校を卒業してから10年以上経過している。インタビューを行う前に、「学生時代の話が聞きたい」と言うと、「もう昔のことだからあまり覚えていないかも知れない」と前置きされることが多かった。しかし話をしていくうちに、詩をどのように覚えたか、どのような詩を朗読していたかと聞くと、ほとんどの人たちが題名を言っただけでその詩を一言一句間違えずに朗読したり、題名や作者の名は覚えていないが、詩自体は間違えることなく朗読をするなど、その部分に関しての記憶を非常に強く持っていることが分かった。

C氏も、当初は「文学の授業で暗記したことは忘れちゃってるよ」と笑っていた。彼女の言う通り、小説の内容や作者に関することはほとんど記憶に残ってはいなかったが、詩に関しては少し話をしている間に、次々と思いついたように、冒頭のさわりの部分から当時好きだった詩まで見事に朗読をして再現してみせてくれた。

このことから、授業の形態に組み込まれた、朗読というパフォーマンスの基本は、暗記とリズムの修得という、詩の身体化であるといえる。生徒たちは詩の内容の理解よりも、まず詩を暗記し上手く朗読することに意識を集中させると言う。極端に言えば、「内容は理解していなくても、暗記して上手く朗読さえできればテストで良い成績が貰える」という意識さえある。繰り返し詩を読んで暗記をし、上手く朗読をするという作業を行

うのである。その作業の中で、ある生徒は詩の中で見つけた、描かれている自分の故郷を想像しながら暗記したと言い、ある生徒は上手く朗読できるようになればなるほど、その詩の言葉とリズムからモンゴルの自然を想像できるようになったと言う。そこで容易く想像されるものは、英雄の顔ではなく身近なモンゴルの自然であり、英雄が生まれ育った故郷の自然だと言うのである。

C氏は暗記が得意で、学校の詩の大会によく出場していたと言う。ある時、この「我が故郷」を大会で朗読しようと、とにかく一生懸命覚え、当日舞台上に立ったが、その時までは暗記し上手く朗読をすることしか考えていなかったのだと言う。

「舞台上上がって、朗読を始めた瞬間に、自分が言っている言葉から急に風景が目の前に浮かんできたのよ。その時に詩の言葉の美しさと、そこから見える風景に気が付いたの。そうしたら、あまりにもこの詩が感動的すぎて、舞台の上で泣いちゃったわけ。」(インフォーマントC氏)

彼女の体験は少し極端ではあるが、多くのインフォーマントが「(技法的に) 素晴らしい詩は、上手く朗読できた時にその情景が想像できる。言葉のリズムは詩の良し悪しを決め、だから上手く朗読するとますます美しさが際立つ」と言い、「自分が朗読したり、誰かの朗読を聞いて、はじめてこの詩は良い詩だと気づいた」と、朗読というパフォーマンスによって詩の良さに気付くことをあげている。

「良い詩とは何か」と言う問いには必ず「韻文であること」という答えが返され、その韻文は朗読というパフォーマンスを前提に作られていることを考えるなら、授業内で繰り返し行われるこのパフォーマンスが生徒たちに詩を理解させる手段となっていると言えるであろう。詩の朗読という技法は、文学教育の実践の中において、詩を身体化させることによって、詩の内容をより明確に理解させていく手段であるのだ。つまり詩を身体化することによって、文学の担う道德教育的な側面をも、身体化させるという作用を持っていることにつながるであろう。

IV. 考察

1. 文学教育が担うもの ―「我が故郷」を事例に―

社会主義時代、民主化以降の教科書に掲載される作品の多くは、各々の時代の思想や国家の方針を反映している。しかし時代に合わせて教科書から削除される作品、新しく掲載される作品などがある中で、常に変わらず掲載され続ける作品もある。そのひとつが前述したナツァグドルジの「我が故郷」である。

1933年に発表されたこの詩は、社会主義時代から現在に至るまで、文学の教科書に掲載され続けており、現在では6年生の教科書に掲載され、習うことになっている。12連で構成されるこの詩は、モンゴルの雄大な自然と悠久の歴史を雄大にうたいあげ、最終連では、「この愛する国土を外敵から守り、新しい国づくりをしなければならない」と訴えている。

この詩に対する印象や感想を、生徒やインフォーマントに聞いたところ、

- a. 旋律が美しい
- b. 聞いていて非常に心地良く耳に馴染む
- c. 朗読していて気持ちが良い
- d. モンゴルの自然が美しくうたわれている
- e. モンゴルの自然がすべて詩の中にある（凝縮されている）

という回答が多くみられた。同時にこの詩に対しては以上のような理由も含めて、「素晴らしい作品だ」、「このような作品はしばらく出ないに違いない」と評価している。これらの回答からも分かるように、この詩の評価は旋律の美しさ（技法）と詩の題材に集約されており、その二つが揃っているからこそ高い評価と支持が得られていると考えられる。

技法的な面では頭韻・脚韻がふまれ、対句も使用されており、韻文形式の詩として完成度の高い作品に仕上がっている。それはa～cの回答からも分かる。声に出すことが前提となっている韻文は、完成度が高ければそ

れだけ美しい旋律になるということは既に述べたとおりであり、またこの詩を朗読するということは、第Ⅲ章において述べたのでここでは割愛する。

では内容はどうか。12連で構成されるこの詩は最後の2連を除いて、モンゴルの雄大な自然をうたっている。最後の2連とその他の連に見られる特徴は後述で仔細にみていくが、回答 d, e が示すように、この詩は「我が故郷」の自然を軸に描かれているという印象を多くのインフォーマントたちが受けているのである。教科書に掲載されたこの詩を初めて読んだときの印象について、インフォーマント B 氏は以下のように語っている。

「とても感動しました。モンゴルの山とか川とか全部入れているでしょう？西の山もあるし、東の山も。モンゴルって凄く広くて、全国回らないと分からないと思っていたから、それが全部分かるって凄いと思ったんです。・・・（大人になった）今はきれいにうたっているから、凄いと思うけれど、子供の頃は子供の考え方で、こんないっぱいの山や川を全部知っていて凄いと思ったんです。」（インフォーマント B 氏）

彼女が語るように、生徒たちの多くも、地図上で見知っている有名な山や川の名前がたくさん登場する詩なので興味深いとしている。同時にそれらが、韻文で構成された限られた表現の中で、美しく描き出されていることを評価している。凝縮されたモンゴルの自然が、12連の詩の中にうたいあげられているという印象は、有名な地名がただ羅列されているだけではなく、韻文によっていかに美しく表現されているかということと関連している。この詩を単にモンゴルの自然をうたった詩としてではなく、高く評価している背景には韻文の存在があるであろう。

一方で文学の授業では、詩の内容をいかに理解していくかも重要とされる。詩から何を読み取っていくのかということである。「我が故郷」が「モンゴル人なら誰でもが知っている」と言われる理由は、一つには先に述べたように詩の技法として非常に優れた表現がなされていること、また、その内容がモンゴルの自然を美しくうたっていることから、親しみやすいということがあげられる。それは教科書の課題 2 が示す、「自分の住んで

いるところや住んでいた土地、自分の知っている地がこの詩の中にある」という発見から始まる。「有名な人の書いた詩の中に、自分の故郷があることを誇りに思う」と意識させるのである。その意識は、故郷への郷愁や愛着、誇りという言葉に置き換えられるが、自らの故郷を詩の中に位置付けることによって、詩全体がうたいあげ、繰り返される「これが私の故郷、モンゴルのうるわしき国」というフレーズに還元されていくのである。故郷はすなわち「祖国」であるモンゴルに通じており、それを象徴するのが10連に渡ってうたわれるモンゴルの自然であるのだ。

しかしこの詩は、インフォーマントたちの印象としても「自然を美しくうたっている」と語られているが、最後の2連でうたわれている内容や、課題3にみられるように、自然だけをうたったものではなく、寧ろ非常に政治色が濃い詩であることが読み取れる。

匈奴の時代から私の祖先の故地
青きモンゴルの時代に力強く興った国
いにしえより年々歳々なれ親しんだ故郷
今では新しきモンゴルの赤旗におおわれた国

生まれ育った私たち民族の愛する故郷
敵が侵入するならば直ちにけ散らそう
宿命のこの祖国に革命国家を興し
のちの新しき世に栄誉ある功績を打ちたてよう

この行は、まさにナツゲドルジが「我が故郷」を発表した当時の、社会主義を意識した内容である。課題3もこの行を受けて、祖国に対して貢献をした英雄について考えさせる内容となっている。社会主義時代の教育の中心は国家に貢献する英雄たる「人」であった。つまりこの2連の詩の内容と課題は、英雄たる「人」を通して国家の求める「人」と、その人々によって維持される国を形成していくための意識を促すものであると考えられる。

だが生徒たちがこの詩から読み取り、祖国に繋げていくものは、モンゴルの自然なのである。ではなぜこの詩の印象として自然が語られていくのであろうか。一つには社会主義時代から現在まで、「我が故郷」が変わらず教科書に掲載され続けているということから考察できる。まずチンギス・ハーンなど「民族主義的」なものがタブー視された社会主義の時代に、この詩はモンゴルの自然と社会主義をうたっており、技法も卓越していたことから教科書に掲載されることになった。「自然は普遍的なテーマであり、無難であるから、掲載するのに何の問題もない」というG氏の意見にあるように、モンゴルの自然と故郷、祖国をうたうこの詩からは、社会主義時代の「人」中心の国家形成にも最後の2連で対応し、なおかつ自然は普遍的であるというモンゴル人の意識をも垣間見ることができる。ここでいう自然とは山や川であると同時に、課題1にあるように、「私の生れ落ちた地、洗った水」という慣用句が示す「故郷」であり「祖国」を象徴する言葉なのである。

更にその意識は、社会主義から民主化への移行を経験した人々が抱く、「人」に対する評価の変化にも対応することになる。チンギス・ハーンを英雄とすることが社会主義時代のタブーであった事実からも分かるように、「人」への評価は時代や政治、また体制によって大きな変容を伴う。今までの英雄が急に悪人となり、また時代が変われば英雄として崇敬される。時代時代によって、新しい英雄と賞賛される人々が姿を現しては、消えてゆく。つまり「人」への評価ほど曖昧なものはないという経験があるのである。だからこそ普遍的な自然に価値の重さをおき、「我が故郷」から自然の美しさを読み取ろうとするのである。

現在では「我が故郷」の自然の描写に「郷愁」を重ねる。7連や8連では減少している遊牧の生活がうたわれており、8連や10連ではその遊牧の地で暮らしていた「モンゴル人にとって」の子や孫、父母たちが生活し、その思いが深く刻まれた大地や故郷がうたわれている。「郷愁」に伴う「故郷化」という視点が、更にその故郷にある自然への思いを強くさせるのである。

以上で述べた三点と、前述したような実生活での故郷や見知った自然が

重なることによって、「我が故郷」は自然をテーマとし、その自然が故郷と最終的には祖国を繋いでいくものとして印象付けられていくのである。

「我が故郷」という詩は、学校教育の中で技法・内容・パフォーマンスが一体化することによって、そこから自然という一つの祖国像を生徒たちに印象付ける結果となった。国が求める「モンゴル人像」は社会や政治の変容に伴って変化していくものであり、実際それはモンゴルにおいては社会主義時代と民主化への移行の中で、学校教育・教科書にも如実にあらわれていた。例えば社会主義時代はスフバートルやレーニンといった英雄たる「人」中心の国家であり、その国家を支える「モンゴル人像」は党のイデオロギーに裏打ちされていた。だがそれと並行するように、自然やモンゴルの大地に普遍的性を求め、それを祖国像として描き続けてきた詩も存在する。それは社会主義時代から現在まで、「我が故郷」が変わらず教科書に掲載され続けていることや、この詩が文学の授業の中でどのように取り扱われ、受け止められてきたかを見ることによって、明らかになったであろう。自然を普遍なものとすることで、社会主義から現在に至るまで政治・経済・社会的な変動があったにも関わらず、このような詩によって共通の「祖国」像を形成されていたと考えられる。

2. 政治変動と文学教育

20世紀のモンゴルは変動の時代であった。社会主義社会の形成や社会主義の放棄に伴う民主化への移行など。その政治史を背景にして、教育と文学も変動を遂げてきている。近代的な学校教育の成立と普及によって識字率が向上し、その結果、口承文芸が主であったモンゴル文学界に、モンゴル近現代文学が成立された。20世紀におけるモンゴルの学校教育と近現代文学の成立と発展は、モンゴル近現代史と切り離せぬ関係にある。ただその政治、教育、文学の変動は常に党や政府など「上」からの働きかけによってもたらされているといえる。

モンゴルの文学教育には、道徳教育的な側面がある。モンゴル文学の出発点は口承文芸である。モンゴル人が文字を獲得する以前より人々の生活に根付いていた口承文芸は、民族の歴史や風俗、習慣といったものを諺や

叙事詩など様々な形態で伝えてきた。口承文芸は人々にとって歴史であり、娯楽であり生活の知恵を伝える手段であり、また教育であったといえよう。つまり口承文芸が伝えるものの根底には、モンゴル人の価値観や世界観が反映されており、そこには道德教育的な側面があったと考えられる。

このことを踏まえて、モンゴルにおける文学と教育の関係を見直していくと、文学を軸にした道德教育の変遷を見ていくことができる。口承文芸が持っていた道德教育的な側面と、そこで伝えられる「道德」は、時代によって内容と形態を変えて受け継がれてきた。チベット仏教の流布によって伝えられる「道德」は仏教的な価値観が中心となっており、書写文学との交わりによって、口承文芸は書き取られ、書き取られた内容が口伝されるという形態をとるようになった。そのようにして伝えられてきた「道德」と道德教育的な側面を持つ文学が、20世紀の変動の時代に学校教育と結びつくことによって、新しい「道德」を普及させるために、道德教育的な側面を強化させられたのではないだろうか。政治的・社会的な変動を国民に理解させ、変動に国民を追従させていく必要があったのである。その手段として、道德教育的な側面を持った文学を学校教育と結びつけ、文学教育というカテゴリーを形成していったと考えられる。

社会主義時代には、党のイデオロギーに沿った「英雄」像を規範とすることで、社会主義社会を形成するのに必要なイデオロギー的道德を浸透させる手段として文学教育が存在した。民主化への移行期には、それまでの社会主義社会において犠牲となった人々や「民族主義的」なものを復権することによって、民主化によってもたらされた新しい「道德」を理解させる手段としての文学教育があった。この二つの政治体制において伝えられる「道德」の内容は全く違うものである。しかし時代が要求する「道德」を浸透させることによって国民をひとつに纏め上げ、変動に対応させていくことに変わりはない。それと同時に、政治的な変動に動揺することのない、自然を中心とした「祖国」像を根底に置くことで、国民の更なる共通性を生み出そうとしている。

その教育の中でも、特に口承文芸に端を発する「詩を朗読する」という教育方針によって、詩は身体化され、文学の担う道德教育的な側面をも、

またその根底にある共通の「祖国」像をも、身体化させるという役割を担っていると考えられるであろう。

*

本稿は最初に述べたように、学校の「外の世界」である学外の環境や生活との関係性にまで考察を深めることができず、学校とそこで行われる文学教育にしばった考察と記述になっている。しかしモンゴルにおける教育関連の研究、特に教科書に関する研究や文学教育に関する研究は未だに少ないのが現状である。そのことから、本研究は限られた場での考察と記述ではあるが、政治体制と学校教育、なかでも文学教育との関係性を扱ったものとして、意義があるのではないと思われる。

しかし現在のモンゴルでは、2005年9月から新教育課程がスタートし、従来の公立10年制から11年制への移行が行われている。新カリキュラムの設定に伴い、文学の授業の内容や方法論に大きな変化はなかったが、前述したように文学の授業そのものの時間数が削減されたり、教師数が減少するという傾向が見られる。このような状況の中で、現在の学校教育における文学教育が、社会主義時代と比べて今後どのような変化を遂げていくのか、例えば、文学教育が以前のような「影響力」を持つことが難しくなるのではないかといったことを、今後関心を持ち続け、研究していく余地は残されていると考える。

注)

- 1) 戦前の『元朝秘史』に関する翻訳には、白鳥庫吉の『元朝秘史』[1943]（出版は白鳥の没後）、小林高四郎の『蒙古の秘史』[1941]などがある。
- 2) 本論文で取り扱う「モンゴル文学・詩」といった言葉は、特に注記のない限り社会主義以降の「近現代文学・近現代詩」を指すものとする。
- 3) 日本とは1972年外交関係樹立。1989年に宇野外相がモンゴルを初訪問している。約15年ほど前までは、モンゴルへの留学は国費留学しかなく、年間数人の狭き門であった。現在では私費の留学生も多数の大学など教育機関で受け入れている。
- 4) 例えば、馬越徹編『現代アジアの教育 ―その伝統と革新―』東信堂[1993]に

はアジアにおける植民地と国民国家の成立を関連させている研究がある。アジアにおける研究は民族教育と国民国家を関連させるものが多く、例えば、市川誠『フィリピンの公教育と宗教 ～成立と展開過程～』東信堂[1999]、竹熊尚夫『マレーシアの民族教育制度研究』九州大学出版[1998]、野津隆志『国民の形成 タイ東北小学校における国民文化形成のエスノグラフィー』明石書店[2005]などがある。

中国に関する研究は国民国家論を直接的に検討していないが、少数民族教育を中心にした記述が多くみられる。例えば、岡本雅享『中国の少数民族教育と言語政策』社会評論社[1999]、小川佳万『社会主義中国における少数民族教育－「民族平等」理念の展開－』東信堂[2001]など。

国民国家と国民文化、国民形成については、西川長夫・渡辺公三編『世紀転換期の国際秩序と国民文化の形成』柏書房[1999]に詳しい。

ヨーロッパ諸国に関するものには、池田賢市『フランスの移民と学校教育』明石書店[2001]、橋本伸也・望田幸男編『ネイションとナショナリズムの教育社会史』昭和堂[2004]などがあり、アメリカに関しては多文化教育と関連させた研究が多い。

教科書に関する研究は歴史学研究会編「歴史学研究 No.815」[2006: 1-42]など。

- 5) 公立N学校のモンゴル語の教室には、「モンゴル語は国家の公的な言葉である」、「モンゴル語の授業で豊かな知識を向上させる」といった標語が張り出されている。
- 6) Ц.Дамдинсүрэн (1908～1986) 文学者、言語文学研究者。1946、47、51年の3度にわたりチョイバルサン賞(45年に制定され、62年より国家賞と改名)を受賞。ソ連留学中に書いた長編詩「わが白髪の母に」(1934)は現代の長編詩の礎として有名。また「捨てられた娘」(1929)はモンゴルで初めての本格的中編小説とされる。『元朝秘史』の現代モンゴル語訳にも貢献。
- 7) 「Уран зохиол бол амьдралын сурах бичиг мөн」(N学校)
「Номын утга далай мэт гүн, тэнгэр мэт уужим дэлхий мэт агуу.: Ц. Дамдинсүрэн」(N学校)
- 8) 「人民大衆の文化水準を向上させる事業」として1921年からモンゴル人民革命

党によって行われた文化改革に関する事業。

- 9) 「モンゴル人民革命党の指導のもとにモンゴル人民が過去50年近くの間になしとげた歴史的な大躍進を示すこと」を課題に、1954年に『モンゴル人民共和国史』として、モンゴル人民共和国科学アカデミー歴史研究所の編著によって、一巻本で刊行され、1966年には大幅に増補された同名の三巻本として新版された。

本稿で使用した『モンゴル史』[1988] 1・2巻はこの三巻本を邦訳したものである。

- 10) 1929年11月7日に(1917年11月7日に)ロシアで起きた11月革命の12周年を記念して発行される。
- 11) 1932年初版。新しい革命文学者の学習に使用される手本となるべき雑誌として発行される。
- 12) 1929年に発行。モンゴル革命新作家同盟によって出版される。
- 13) 1947年国立音楽ドラマ劇場上演の戯曲、芸術活動の状態、及びその改善策について、また1948年第11回党大会の結果と作家の課題に関しても、同じような決議・決定がなされている。
- 14) Ц.Гайтав 詩人。政治詩、党の宣伝詩を書く詩人として有名であった。ガイタブはこの詩によって国家賞(文学部門)を1961年に受賞している。
- 15) 単一のイデオロギーからの脱却。政治的には(人民革命党の)一党独裁制から複数政党制への転換をみとめるということ。
- 16) 例えば先述のガイタブ作“Дамдины Сүхбаатар”は、社会主義時代の教科書にも、民主化以降の教科書にも掲載されている。
- 17) Р.Чойном 詩人。1969年に書いた反国家的な詩によって投獄される。病弱だったため刑期は短縮されるが、釈放後、結核が悪化し43歳で亡くなる。チョイノムの詩は反国家的なものとして、文学史から抹殺されてきたが、88年以降、徐々に関係記事が公開され始め、90年に完全に名誉を回復した。既に彼は亡くなっていたが、90年度の国家賞(文学部門)も受賞している。

チョイノムの復権は、文学界における民主化の象徴とされている。

- 18) Ш.Сүрэнжав 1988年に長編詩「90人の英雄のバラード」「手」で国家賞(文学部門)を受賞。
- 19) “Утга зохиол, урлаг (文芸、芸術)” 文芸、芸術を専門にした新聞。1955

年創刊の“Утга зохиол（文芸）”新聞、1957～1964年発行の“Соёл утга зохиол（文化文芸）”新聞を前身に、1964年から発行されている。

- 20) Д. Пүрэвдорж（1933～） 現代社会を書いた長編叙事詩で有名で、1981年に「黒い雪」などで国家賞（文学部門）を受賞している。
- 21) 歴史教育に関しては減少しているように見えるが、実際は1990年度までの資料では歴史と地理の区別がつけられておらず、両科目が「歴史」科目に含められている（「地歴」という扱い）。1990年度以降は明確に「歴史」と「地理」が分けられており、合計の数字では1992年度1000人、1994年度914人、2004年度955人と増加の傾向にある。
- 22) 『Хүрэн морь』：原因不明の病に罹った母親を助ける為に、1頭しかいない馬を売って仏僧に診てもらうが、仏僧は母親の病気は仏教に熱心に帰依していないことが原因だと言い、またその息子を自らの下で修行させるといいながら、実際は宗教的なことは何もせず、雑用ばかりをさせて奴隷のようにこき使うという話。
- 23) 『元朝秘史（モンゴル秘史）』などの書写文学成立後も、20世紀初頭までモンゴルでは仏典が木版本などで出版されるというようなことはあったが、近代的な出版技術によって作家が作品を流通させるということはなかった[上村 2003: 38]。

識字率も1940年代までは20%未満と低く、口承文芸は文字を知らない民衆の間で重要な位置を占めていた。1946年の「文字改革」（ウイグル式モンゴル文字からキリル文字への移行）以降、識字率は飛躍的に向上していき、これが文学作品の読者層を形成していくことになる。1960年代以降、散文や特に長編小説などが多く出版されてきたのも、識字率の向上によって書写文学の読者層が形成されたことを示しているであろう。

- 24) 世界にある様々な事柄や事象を、三つの言葉に代表させて説明するもの。「この世の森羅万象を観察し、その結果を言葉に託したもので、子供たちに世界観を教えるための言葉として機能している。ものを三つあげてこの世の摂理を教える」[蓮見 1993: 100-101]とされる。実際には例えば「三つの蒼 広い世界の天 消える火の炎 流れる河の水・・・」[МОНГОЛ ЕРТӨНШИЙН ГУРАВ 2002: 435]など、四、五、六、九つなどの発展型がある。

- 25) III.Гаадамба 編集の“Монголын нууц товчоо (元朝秘史)” [1990 : 44]より引用。
- 26) 「かけ声」には「人間と家畜との距離を制御するためのかけ声」、「馬の搾乳をするときのかけ声」、子に授乳させない母畜に対する「子取らせ歌」などがある。モンゴルで五畜（馬・ラクダ・羊・山羊・牛）と呼ばれる家畜に、共通するかけ声もあれば、各々異なったかけ声をかける場合もある[上村 1999 : 38-41]。
- 27) 日常生活の中でモンゴル人の多くは言葉に敏感な態度を示す場合が多い。例えば「死に関することなどの悪いことを言ってしまった場合は、それを取り払うために指でテーブルや壁などをノックするように叩く」、「生まれる前の子供（胎児）について話をするとい悪いものが来るかもしれない（死産するかもしれない）のでタブー」などと、日本で言うところの「言霊」に近い感覚を有しており、言葉の持つ力に關しての風俗習慣が多い。
- 28) Д.Нацагдорж 「モンゴル現代文学の父」。レニングラード、ベルリンなどに留学。若くして政府の書記官や、科学アカデミーの研究員として活躍する。詩、小説、戯曲などの創作を行う。数度にわたる逮捕、拘束を経験し、1937年7月不慮の死を遂げる。
- 29) ナツァグドルジの最も有名な詩で、現在でも年齢を問わず愛唱され、「モンゴル人なら誰でもが知っている」と言われる詩のひとつである。2005年発行のモンゴルの韻文精選集である、『モンゴルの選ばれた詩歌（韻文）』（“Монголын Сонгомол Яруу Найраг”）にも、彼の代表作として掲載されている。ウランバートルの児童公園にある彼の銅像の台座にも、この詩の最初の連がウイグル式モンゴル文字で刻まれている。
- 30) “Унасан газар, угаасан ус минь” 直訳は「私の落ちた地、洗った水」になるが、これは「私が生れ落ちて私が洗われた（産湯をつかった）地」という意味で、「故郷」を表す言葉である。
- 31) “Уран зохиол 6（文学 6）”（6年生の文学の教科書）[2000 : 34]より引用。訳は筆者による。

参考文献

〈日本語文献〉

岡田和行 他

1997『「モンゴル文学を味わう」 アジア理解講座 1997年度第1期 報告書』
国際交流基金アジアセンター。

川田順造

1992『口頭伝承論』 河出書房出版。

芝山豊 岡田和行・編

2003『モンゴル文学への誘い』 明石書店。

中見立夫・編

2002『境界を超えて 東アジアの周縁から』（アジア理解講座1） 山川出版社。

西川長夫 山口幸二 渡辺公三・編

1998『アジアの多文化社会と国民国家』 人文書院。

西川長夫 渡辺公三・編

1999『世紀転換期の国際秩序と国民文化の形成』 柏書房。

蓮見治雄

1989「モンゴルの詩と詩人」 『詩と思想』57 土曜美術社。

1993『チンギス・ハーンの伝説 モンゴル口承文芸』（角川選書242） 角川書店。

バトバヤル, Ts・著 芦村京 田中克彦・訳

2002『モンゴル現代史』。

松原正毅 小長谷有紀 楊海英・編著

2005『ユーラシア草原からのメッセージ 遊牧研究の最前線』 平凡社。

宮脇淳子

2002『モンゴルの歴史 遊牧民の誕生からモンゴル国まで』（刀水歴史全書59）
刀水書房。

モスタールト, A・著 磯野富士子・訳

1996『オールドス口碑集 モンゴルの民間伝承』（東洋文庫59） 平凡社。

モンゴル科学アカデミー歴史研究所・編著 田中克彦・監修 二木博史 他・訳

1988『モンゴル史 1』 恒文社。

1988『モンゴル史 2』 恒文社。

楊海英

- 1999 『『チンギス・ハーンの二頭の駿馬』について ―写本と口頭伝承の比較を中心―』 国立民族学博物館研究報告 1999-24巻 3号 国立民族学博物館。
 2004 『チンギス・ハーン祭祀 試みとしての歴史人類学的再構成』 風響社。
 2005 『モンゴル草原の文人たち 手写本が語る民族誌』 平凡社。

和光大学モンゴル学術調査団

- 1999 『変容するモンゴル世界 ―国境にまたがる民―』 新幹社。

歴史学研究会・編集

- 2006 「歴史学研究」No.815 青木書店。

〈モンゴル語文献〉

В.Одгийв

- 1968 “Монголын орчин үеийн уран зохиолын товч түүх”, Улаанбаатар.

Д.Батжаргал

- 2005 “ШҮЭГ ЯАЖБИЧИХ ВЭ?”, Улаанбаатар.

Д.Галбаатар

- 2002 “Уран зохиолын онолын ойлголт, нэр томъёоны тайлбар толь”, Токио

Д.Цагаан, Д.Цэнд

- 1958 “МОНГОЛЫН УРАН ЗОХИОЛ Дунд сургуулийн багш нарт гарын
 авлага болгов”, Улаанбаатар.

Д.Цэрэнёодном

- 2002 “МОНГОЛ Ертөнцийн гурав”, Улаанбаатар.

Ё.Баатарбилэг

- 2000 “Монголын түүхийн арван долоон жаран.1027-2000 он”, Улаанбаатар.

Ш.Гаадамба

- 1990 “МОНГОЛЫН НУУЦ ТОВЧОО”, Улаанбаатар.

Шинжлэх ухааны академи хэл зохиолын хүрээлэн

- 2001 “Монголын уран зохиолын лавлах торь”, Улаанбаатар.

〈モンゴル語資料〉

Ардын боловсролын яамны хэвлэл

- 1976 “ЕРӨНХИЙ БОЛОВСРОЛ, ХӨДӨЛМӨР ПОЛИТЕХНИКИЙН ДУНД

СРГУУЛЬД ҮЗЭХ

ХИЧЭЭЛИЙН ПРОГРАММ (Монгол хэл бичиг, уран зохиол)

IV-Ханги", Улаанбаатар.

БНМАУ-ын Ардын Боловсролын Яам

1982 "ПРОГРАММ Монгол хэл, уран зохиол IV-Ханги", Улаанбаатар.

Боловсрол, соёл, шинжлэх ухааны яам

2004 "БОЛОВСРОЛ, СОЁЛ, УРЛАГ, ШИНЖЛЭХ УХААН, ТЕХНОЛОГИЙН
САЛБАРЫН

СТАТИСТИНКИЙН МЭДЭЭЛЛИЙН ЭМХТГЭЛ", Улаанбаатар.

Боловсрол, соёл, шинжлэх ухааны яам

2004 "МОНГОЛ ХЭЛ, УРАН ЗОХИОЛЫН БОЛОВСРОЛЫН СТАНДАРТ",
Улаанбаатар.

Монгол улсын Шинжлэх ухаан, боловсролын яам

1996 "БОЛОВСРОЛ 1980-1981 оны хичээлийн жилээс
1994-1995 оны хичээлийн жилийн статистикийн судалгаа",
Улаанбаатар.

Стандарчилал, хэмжилзүйн үндэсний төв

2004 "Монгол Улсын Стандарт Бага, Дунд Боловсрол
МОНГОЛ ХЭЛ, УРАН ЗОХИОЛЫН БОЛОВСРОЛ", Улаанбаатар.

Уран зохиолын унших бичиг

1953 (1), 1956 (6), 1959, 1960 (3), 1962 (4), 1965 (10), 1966 (1), 1970 (2),
1970 (6), 1970 (10), 1975 (4), 1978 (10), 1979 (2), 1984 (8), 1987 (10),
1994 (10), 1996 (7), 1997 (9), 1997 (10), 1998 (7), 2000 (6), 2000 (10),
2001 (4), 2003 (7), 2003 (8), 2003 (10), 2004 (10・①), 2004 (10・②).

(文学の教科書：年代とカッコ内は対象学年)

"Уран үгсийн чуулган"

1964, 1969, 1975, 1977, 1988, Улаанбаатар.

Literary Education in the Age of Political Change

— In the Case of Schools, Ulaanbaatar, Mongolia —

YAMADA Kiyoko